

巨男の話

新美南吉

青空文庫

巨男とお母さんの住んでいたところはここからたいへん遠くのある森の中でした。
 巨男のお母さんはおそろしい魔女でした。ほら驚くような高い鼻や、蛇のような鋭い眼を持ったあのおそろしい魔女でした。

それはあるお月夜のことでしたよ。

魔女と巨男がねむりについたら、だれか家の外から戸をたたきました。巨男

が起きていって戸をあけてみると、ふたりの女が、ひとりの少女をつれて立っていたのです。

「この方は、この国の王女様です。私たちは侍女なんです。今日、森へ遊びにお姫様をおつれ申しましたところ、道にまよってとうとうここへきてしまいました。どうか、今晩だけ宿をかせてください。」とひとりの女がいました。

すると、奥から、

「どうぞ、むさいところですが、ゆつくり休んでください。」と魔女がやさしい声でいいました。そこで三人は、中へはいつて休みました。

よく朝、巨男が眼をさましてみると、ふたりの女は、黒い鳥に、お姫さまは白鳥にかわっていました。それは、魔女が、魔法でそうしたのです。

魔女は、巨男のとめるのもかまわず、三羽の鳥を、窓から投げ出してやりました。

三羽の鳥は飛んでいきました。けれど、白鳥は、夕方になると悲しげに鳴いて魔女の家に帰ってきました。巨男は不憫に思つて、こっそりと白鳥を飼つてやることにしました。昼間は野原へ放つてやつて、夜は自分のベッドの中でねさせました。

巨男が、大きくなるにつれて魔女は、だんだん年をとつて、ついに動けなくなりました。それで、毎日ベッドの上に横たわつて、息子の巨男に魔法を教えました。けれど、その魔法は、みな、人間を種々の鳥獣にかえるものでした。

そのうちに、魔女はますます弱つて、もう死にそうになりました。このときに、魔法をとく法を聞いておかねば、あの白鳥は、いつまでたつても、お姫様にかえれないと思つたものですから、巨男は、魔女の枕もとによつて、

「いままで、お母さんは人間を種々の鳥獣にかえる法を教えてくださいましたが、まだ、魔法をとくことを教えてくれません。どうか教えてください。」とたのみました。

「では、教えましょう。」と、魔女はいいましたが、もう息もきれぎれで、声は蚊かのようです。

「お母さん、はつきりいつてくださいい！」

巨男おおおとこは、魔女の口もとへ耳をもつていきました。

「その鳥獣ちようじゆうが、涙なみだを流せば、もとの姿すがたにかえるよ……」これだけいうと、魔女は、頭をたれて死んでしまいましたよ。

巨男おおおとこは、死んだ魔女を白い棺かんにおさめて、椰子やしの木の根もとにうめました。そして、すぐ白鳥をつれて森の家を出ました。

巨男おおおとこは、都みやこへのぼろうと思いました。途中でどうかして、白鳥に涙なみだを流させようとなりました。頭をたたいたり、お尻しりをつねったりしたのです。けれど白鳥は、けっして一滴てきえ涙なみだを出しませんでした。ただ、悲しそうな声をあげたきりでした。おしまいには、かわいそうになつて、巨男おおおとこはいつのまにか白鳥に頬ほずりをしていました。そして巨男おおおとこの眼めに涙なみだがありました。

巨男おおおとこは、夜となく昼となく歩き通して、家を出てから七日目に、めぎす都みやこに着きました。けれど、都の人びとは、巨男おおおとこがおそろしい魔女の息子むすこだということを知ってい

ましたので、とおまわしに巨男おおおとこを殺ころそうと考えました。そこでひとりの男が総代そうだいとなつて、王様の住んでいられる宮殿きゆうでんへまいりました。そして、王様にこう申し上げました。

「王様の宮殿きゆうでんは、美しいけれど、大理石の建物たてものがないのは、玉にきずだとある旅たび人が申ししていました。大理石の塔とうでもたてられてはいかがですか？」

「なるほど、それはよからう、しかし、大理石というのは、いったいどこにあるのか？」
「ここから、ずーつと南の方へ、山を一つと沙漠さばくを一つこえていくと一つの部落に着きます。そこに、大理石はいくらでもあるそうです。」

「そうか、けれどだれがとりにいくのか？」

「それは、いま都みやこにいる巨男おおおとこがよいでしょう。彼はたけが椰子やしの木ほどで、一足で小さな丘おかをこえてしまえます。」

「では、その男をよべ。」

巨男おおおとこは宮殿きゆうでんにつれられていきました。そして王様から、大理石をとりにいくように命ぜられました。にげるといけないからというので、巨男おおおとこの足には鉄の鎖くさりがむす

ばれました。

「ではいつてきます。」と巨男おおおとこはいつて、やはり白鳥をつれ、南の方へ旅立ちました。
巨男おおおとこの進むにつれて、宮殿きゆうでんにたまつていた鎖くさりが少なくなりました。ちょうど十九

日目に、その鎖くさりのたまりはなくなつて、はしが太い柱にむすばれてある鎖くさりは、ピンとはり
ました。

そのときには、巨男おおおとこも種々難儀なんぎをして、大理石の部落に着いていました。部落の人
びとは、たいへん親切でしたので、大理石をいくらでもくれました。巨男おおおとこは大きな大
理石を三つもらつて、それを背負せおい、白鳥をその上にとまらして帰途きとにつきました。

都みやこの方では、はつていた鎖くさりがゆるんできたので、人びとはそれをたぐりました。帰りに
は、重い石をもつていたので、巨男おおおとこは三十日かかつてやつと都みやこに到着とうちゃくしました。

苦しい長い旅のために、巨男おおおとこはやつれはてて枯木かれきのようになりました。しかしそれ
でもゆるされなかつたんです。すぐその日から、宮庭きゆうていの泉いずみのほとりに、大理石で塔とう
たてることをおおせつかりました。けれど、心の美しい巨男おおおとこは、けつしてなげいたり、
悲しんだりしなかつたのですよ。命ぜられた通り、毎日毎夜、つちとのみを持って、大理

石を切り、それをだんだんつまかさねていきました。巨男おおおとこは、仕事をしているときでもあの白鳥を背せにとまらしていました。白鳥もおとなしくとまっていました。巨男おおおとこは、つちをふりながらちようど人間にいうように白鳥にいました。

「お前は、いったいどうしたら涙なみだを流すのか？ お前はいつ涙なみだを流すのか？ お前は涙なみだを流さなくては、いつまでたつても、お姫ひめさまにはなれないのだよ、私はお前がかわいそうだ。だから早く美しいものとお姫ひめ様にかえつてくれ。」

そんなときには、白鳥は首をたれて巨男おおおとこの話はなしを聞いていましたが、涙なみだを流したことはありませんでした。

巨男おおおとこの仕事は、どんどん進んでいきました。夜ふけでも、つま上げられた塔とうの上から、つちの音が都みやこの空にひびきました。都の人びとは、ねる前に、きつと窓まどをあけて巨男おおおとこの働とこいている塔とうの上をみました。そこには、星と同じような灯ひの光が、またたいていました。

三月もたつと、巨男おおおとこがとつてきた大理石はつきてしまいました。塔とうの高さは宮きゆうで殿んのどの建物たてものよりも高くなりました。それでも、王様は、それでよいとはおっしゃいませんでした。そこで、巨男おおおとこはふたたび南方へ旅立ちました。長い鎖くさりをひきずって、

白鳥をつれ、巨男おおおとこは広い広い沙漠さばくをくる日もくる日も歩いていきました。巨男おおおとこは、また大きな大理石を三つもらって都みやこに帰りました。すぐその日からつちとのみをとってそれを切りはじめました。

塔とうはますます高くなりましたよ。

空がくもって星がみられない夜でも、巨男おおおとこの灯ひはたった一つの星のようにポツンと浮かび出ていました。

それは、すこし風ふうのつよい宵よいでした。都みやこの人びとは、窓まどから塔とうの上の灯ひをあおいでみました。灯ひは風のために、ゆらゆらゆれていました。人びとはそのとき、はじめて巨男おおおとこがかわいそうになりました。王様まじも窓まどから顔をお出しになって、塔とうの上をみました。ごーごーとなる風のすきまに、巨男おおおとこのつちの音がかすかに聞こえてきました。やはり王様まじも巨男おおおとこをあわれに思いになったのか、

「こんな夜に働かせておくのは気の毒どくだ。それにあの男は、おとなしい。明日あしたはもうあの仕事をやめさせよう。」とひとりいわれました。そんなことはすこしも知らずに、巨男おおおとこはごーごーやっていました。そして、どんなことをしたら白鳥をなかせてお姫様ひめさまに

させることができるだろうと考えていました。ふと、巨男おおおとこは自分が死んだら——と考
えました。そこで、温かい巨男おおおとこの背せでねむっている白鳥に話しかけました。

「私が死んだら、お前は悲しくないか？」

すると白鳥は眼めをさまして、「そんなことをしてはいけない」というように羽ばたきし
ました。

「私が死んではいけないのかい？ それなら、私が死んだらお前は涙なみだを流すにちがいない。
よし！ 私はお前のために天国へいこう。」

巨男おおおとこは立ちあがって、背中せなかから白鳥をおろしました。白鳥は、とめようとして、巨男おおおとこ
の着物のしを引きました。巨男おおおとこは、白鳥と最後の頬ほずりをして、

「では、かわいい白鳥よ、さようなら、お前はもとの美しいお姫様ひめさまに帰るのだよ……」
といって、高い塔とうの上から身を投げました。地に落ちるとただちに死んでしまいました。

白鳥は、どんなになげいたことでしょう。涙なみだは滝たきのように出ました。そして、そのとき
魔法まほうはとけて、うるわしいもとの王女になりました。王女はなきじやくりながら、高い塔とう
の階かい段だんをころがるように走りおりて、お父さまの王様の部屋にとびこみました。

そして、いままでのことを王様に話したんです。王様はそれを聞いて、面おもてをふせて巨男おおおとこ

男とこに謝罪しやがいし、また感謝かんしゃしました。

まもなく、王様から都みやこの人びとへそれが伝えられたとき、都の人びともないて巨男おおおとこにあやまりました。

巨男おおおとこのむくろは月桂樹げつけいじゆの葉でおおわれて都の東にある沙丘さきゆうに葬ほうむられました。

王女は、よく王様やお母さんの后きさきに申もうしましたよ。

「私は、いつまでも白鳥でいて、巨男おおおとこの背中せなかにとまっていたかったわ。」

空がくもっていて、金星がたった一つうるんでみえる夜ふけなど、南国の人びとはいまでも、

「あれは、巨男おおおとこの灯ひだ。」と空をあおいで申します。

青空文庫情報

底本：「こんぎつね 新美南吉童話作品集」てのり文庫、大日本図書

1988（昭和63）年7月8日第1刷発行

親本：「校定 新美南吉全集」大日本図書

入力：もりみつじゅんじ

校正：鈴木厚司

2003年5月18日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

巨男の話

新美南吉

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>